

巻頭写真 イランのオリエントブナ林 Oriental beech forest in Iran

去る2004年5月9～15日、イランのテヘランにおいてIUFRO(国際森林研究機関連合)のシンポジウム“Improvement and Silviculture of Beech-IUFRO 7th Beech Symposium and Field Tour in Iran”が開催された。林学を主とするシンポジウムであったので、私としては専門外であったが、西アジア地域に分布するオリエントブナ *Fagus orientalis* 林を観察するエクスカージョンがあるというので、参加することにした。

学会の参加者数は名簿によると約120名、講演数32件、ポスター発表26件。海外からの参加は、ドイツ(9名)、デンマーク(7名)、スイス(4名)、日本(4名)、ルーマニア(3名)、スロバキア、ウクライナ、アメリカ合衆国(各1名)であった。シンポジウムは、種子生産、木材の性質、更新と初期の林分発達、更新(自然に近づける)、更新とプランニングに分けられ、活発な討論がなされた。海外からの参加者から分かるように、ヨーロッパブナとオリエントブナの研究が大半を占めた。

さて、イランは国土の大部分が乾燥地帯で、森林地帯は国土の約7%を占めるに過ぎない。その森林地帯は、カスピ海の南岸を画するアルボルズ山脈(標高4000m前後)のカスピ海側斜面およびザグロス山脈に集中している。講演の終了後、13～15日は、待望のエクスカージョンで、テヘランからアルボルズ山脈の標高3000m付近の峠を越え、カスピ海南岸の森林地帯へと移動した。案内者は、Research Institute of Forests and RangelandsのKhosro Sagheb-Talebi博士とテヘラン大学のMohammad Reza Marvie Mohadjer教授である。アルボルズ山脈の南斜面(テヘラン側)は一様に乾燥地帯で、地中海型の植生(Irano-Turanian植生区)に属し、河川周辺のポプラ類を主とする植生と、標高1800～3000mのビャクシン *Juniperus excelsa* の疎林を除けば、森林は成立していない。峠を越えカスピ海側の斜面に入ると、急に森林地帯が広がるようになる。この地域はEuxino-Hyrcanian植生区に属する。



写真1 カスピ海南岸 Noshahr のオリエントブナの純林。林床の植物は少ない。標高1100m、年平均気温は12.5°C、年降水量1300mm。

見学したオリエントブナ林は2か所である。ひとつは、Noshahrにあるテヘラン大学の演習林（標高0～2200 m、面積10,000 ha）内に位置し、標高は1100 m前後の林分である（写真1）。もう一つは、Tonekabonにある国有林の中のオリエントブナ林で、ツゲ *Buxus hyrcana* を特徴的に低木層（といっても樹高15 mくらいになる）にもつ林分である。

日本のブナ林とくらべてオリエントブナ林の印象的な違いは、オリエントブナの樹高がブナに比べて圧倒的に高いことである。観察したNoshahrのオリエントブナ林は、樹高が30～40 m程度であったが、最高は55 mに達するものがあるという。一瞬、熱帯林を眺めているような錯覚にとらわれる。大径木が普通に見られ（写真2）、樹幹はかなり上部までまっすぐに伸びて枝分かれせず（写真3）、あたかも人工林であるかのような印象を受けた。ブナの優占度は極めて高く、胸高断面積で90%を超え、わずかにカエデ *Acer velutinum*、トネリコ *Fraxinus excelsior*、ナラ *Quercus castaneifolia* などを交える。いずれの樹種もブナに劣らず樹高が高くなる。河畔に生育するハンノキ *Alnus subcordata* も巨木となる。低木層は発達せず、林床はまばらに草本類に覆われる程度である。*Ruscus hyrcanus* という硬葉のユリ科草本を特徴的に伴う。観察した森林は、自然林ということであったが、伐採された経験がないというだけで、放牧によるグレイジングの影響は林床植生には極めて大きいと思われた。

学会のポスター発表によれば、イランのオリエントブナ林は、このような樹高が高いタイプだけでなく、地域によっては日本のブナ林のように樹高が高くないタイプもあり、林床にはササ類がないかわりにキイチゴ類が繁茂して、更新を阻害しているという。積雪の多い地域が、このようなタイプの森林になるということであった。

カスピ海南岸は、過去100万年間温帯林が消滅したことはなかったと考えられている。それにしても、樹木の種数は極めて少なく約80種を数えるに過ぎず、かつて樹木の種数を著しく減じるような事件があったのではないかと思われる。このような単純な森林構成が植生の動態に与える影響は大きいであろう。日本のように、極めて多数の種から構成される植生の動態とは、自ずと異なってくるに違いない。世界的に見ると、温帯域において、日本や東アジアの様に豊富な構成種を抱える地域はむしろ希なのかもしれない。東アジア地域は新第三紀以降の気候変動の中で温帯種のレフュジアとして永らく機能したのではないかと思われ、私にとってはあらためて日本の植生の豊かさをみなおす機会となった。

（紀藤典夫 Norio Kito）



写真2 オリエントブナの大径木。



写真3 まっすぐに伸びるオリエントブナの樹幹。